

二〇〇七年度大学入試センター試験 解説〈現代文〉

第1問 評論文 山本健吉「日本の庭について」

〔総括〕

著者の山本健吉は、文芸評論家。一九八八年の共通一次試験本試験で一度出題されたことがある。現代俳句への造詣が深く、日本古典文学に関しての評論も多い。

今回出題された文章は、「庭園」を題材として日本と西洋との対比を論じた芸術論。テーマとしてはオーソドックスなものだが、本文の長さが昨年度より約五割増しと長文化し、速読力が求められた。

問1の漢字が昨年よりやや難しくなった。また、問3の「一期の出会い」に絡む設問や、問4の志賀直哉の主張を読み取る問題などは設問の意図を汲んで解答する必要がある、やや難しかったが、全体では標準的なレベルといえる。

〔解説〕

問1 漢字問題

どれも大学入試で出題頻度の高い漢字なので、日ごろから漢字の勉強をきちんとしている人は満点がとれたはずだ。(エ)のように一つの漢字を訓と音の両面から問う問題はセンターでは頻出なので、日ごろから多角的な漢字の勉強を心がけてほしい。

(ア) 祈念	①	祈願	②	棄権	③	騎馬	④	旗手	⑤	軌道
(イ) 記念碑	①	被害	②	卑近	③	罷免	④	碑文	⑤	疲弊
(ウ) 征服	①	犠牲	②	調整	③	先制	④	一斉	⑤	遠征
(エ) 朽ち	①	究明	②	及第	③	階級	④	紛糾	⑤	不朽
(オ) 媒介	①	栽培	②	賠償	③	触媒	④	陪審	⑤	倍加
正解 (ア)	①	(イ)	④	(ウ)	⑤	(エ)	⑤	(オ)	③	

問2 基本

傍線部A「造型し構成し変容せしめよう」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選べ。

日本とヨーロッパの芸術観を対比的に説明している箇所、傍線部は「ヨーロッパ流の芸術観」の説明になっていることをつかむことが大前提。

傍線部Aの直前が「しだから」となっており、直前との関係が「因果関係」であることに気が付けば容易に正解にたどり着ける。つまり、傍線部の直前に、「ヨーロッパ流の芸術観では、芸術とは自然を素材にして、それに人工を加えることで完成に達せしめられた永遠的存在なのだから」とあるのが原因。

その原因部分をきちんと踏まえている選択肢は②で、これが正解。

①の「一瞬の生命の示現」では、「永遠的存在」の反対なので×。③は全体的に日本の芸術観といえるもので×。④も「変化こそ自然の本質だ」というのは日本の芸術観で×。⑤は「芸術家たちの造型意志」はいいとしても、「自然の素材の変化を生かしつつ」以下が、本文に書かれている内容と合わないので×。

正解 ②

問3 難

傍線部B「造型ではなく、花の命を惜しむことが、生花の極意である」とあるが、筆者は、この生花に続けて、茶の湯、連句の例を挙げている。それは「一期の出会い」を踏まえた上で、日本の芸術のどのような点を強調するためか。その説明として最も適当なものを選べ。

実際の問題冊子では三行もあった設問の意図をしっかりとつかまないと正解するのは難しい問題。ここで問われているのは、「一期の出会い」を踏まえた上での「日本の芸術の特色」なので、その説明として正しいものを選ぶ。

ここまでの本文の流れは、日本の芸術と西洋の芸術との対比であり、傍線部Aは西洋の芸術観の説明が求められたものだった。それに対して傍線部Bは日本の芸術の特色について問われている。

ここで筆者が「一期の出会い」と言い、生花や茶の湯や連句の例を挙げているのはなぜか？

それは、日本の芸術は「造型意志が極端に弱い」ということを説明するために書かれていることをつかむのがポイントだ。また、「一期一会」の説明としては、芭蕉の例のところに「自己を没却し、自然のままに随順し、仲間と楽しみを一つにする」ことが「一期一会の歡び」であると書かれているのをつかむ。

文章の構造としては、まず頭でわかりにくい抽象的な主張をしたあと、具体例を出してそれをわかりやすく説明し、最後にまとめがあるという形をとっている。次のような形だ。

A 抽象的主張∥日本の芸術は造型意志が弱い
具体例（傍線部Bはこの部分にある）

A' 抽象的主張∥自己を没却し、自然のままに随順し、仲間と楽しみを一つにする

傍線部Bの説明として必要なものはA、A'であり、この内容を含むのは、「芸術における個の表現意識の弱さ」「仲間で作り合う」と説明している④のみなので、これが正解。他の選択肢では、そうした「自己（⇔仲間）」「造型意志の弱さ」についての言及がないので×。

「一期の出会い」という語句の意味に引つ張られて、③の「利那性」を選ばないこと。ここではあくまで「個と造型意志の弱さ」が日本の芸術の特色であることを述べているのを読み落とさないことだ。

正解 ④

問4 標準

傍線部C「この庭の絶賛者の一人に志賀直哉氏がある」とあるが、志賀が絶賛したのはなぜだと筆者は考えているか。その説明として最も適当なものを選べ。

日本の芸術を説明するにあたり、傍線部Cの箇所は「庭園」を題材として考察に入っている箇所だ。「この庭」というのは「龍安寺の石庭」のこと。

ここでのポイントは、筆者の山本健吉が志賀直哉の意見に対して疑問を呈していることをつかむことだろう。また、問3までの西洋と日本の芸術観の違いを押さえておくことが読解上のポイントになる。

筆者の考える日本の芸術は、問3でみたように、個人の表現意識が弱く、それに伴って造型意志が弱い」というのが特色であった。ところが、日本の庭の代表のように言われている「龍安寺の石庭」に関して、筆者は「果たして日本の庭を代表する傑作なのか」と疑問を呈している。

そして、志賀直哉が絶賛した理由として、「永遠不変のキネンヒ的な造型物を志向するヨーロッパ流の芸術理念の上に、飽くまでも作者の個の表現としての作品を重んずる近代風の考えが重なっているのではなからうか」と結論付けている。選択肢をみていくと、こうした「造型意志」と「作者の個の

表現」について説明してあるものは⑤しかなく、これが正解。

残りの選択肢を消去法で消していくと、①は「精巧な模倣」、②は「日本の芸術理念とヨーロッパの芸術理念との幸福な出会い」、③は「かえって」以下の内容、④は「一期一会の歎びにすべてをかける」がそれぞれ×にあたる。

正解 ⑤

問5 基本

傍線部D「この非日常性は例外と言うべきである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選べ。

センター現代文で頻出の「指示語問題」。

傍線部の冒頭に「この」という指示語があるように、ここでの「非日常性」とは、直前の内容を指している。引用されている志賀直哉の言葉の直前の「あまりに息づまるような、窮屈きわまる庭」「日本の多くの庭の、人の気持をくつろがせ、ここにない」の箇所である。

選択肢では、③が過不足なく指示語で指し示された内容を置き換えていて正解。日本の多くの庭が「人をくつろがせるものである」のに対して、龍安寺の石庭は「緊張感をもって見ることを強いる」という関係をつかむ。

この問題に関しては、「指示語問題」という視点が大切なので、指示語の指し示す内容を含んでいない選択肢は×になる。正解の③以外は指示語の指し示す内容を含んでいない。

正解 ③

問6 基本

本文は、空白行(6ページ)によって前後に分けられているが、本文の内容や展開の説明として最も適当なものを選べ。

昨年度の間6も「論の進め方」が問われたが、今年も同様に「本文の内容や展開の説明」を求める問題になっている。二〇〇五年までは、評論文の最後の問題は「内容一致」が主であったので、新課程になってからは二年連続して論の進め方・本文の展開、といったものに焦点が当てられている。難易度としては、それまでの内容一致よりも易しく、選択肢の長さも昨年よりも短くなっているので解答しやすかったはずだ。

こうした内容一致や論の進め方の問題は、基本的に選択肢を比較して消去していく形で解いていく。

①は、「後半では一転して」以下が間違い。「龍安寺の石庭を代表とする日本の庭」とあるが、筆者は龍安寺の石庭は日本の庭の中では例外だと結論

付けている。

②は、前半の説明はまったく問題がなく○。後半に関しても①と対照的に「龍安寺の石庭は日本の庭の例外として位置づけられる」としておりOK。これが正解。

③は、「後半では両者の芸術理念の共通点に普遍性を認めつつ」以下の説明が×。①同様、龍安寺の石庭に対する筆者の意見を完全に取り違えている。

④も龍安寺の石庭のとらえ方が間違っている×。

⑤は、前半部分の「抽象的」が×。さらに、前半と後半で対比されている内容についても間違っている。

正解 ②

第2問 小説文 堀江敏幸「送り火」

〔総括〕

二年連続して現代作家からの出題で、著者の堀江敏幸は『熊の敷石』で芥川賞を受賞した小説家。フランス文学者でもあり、現在は明治大学理工学部教授。今回の内容はやや受験生にとって読み取りにくいものだけに、間違って読み取ると大きく失点してしまう可能性がある。また、文章量が多く、解くのに時間がかかった人も多かったのではないか。

例年出題される問1の語句問題は、今年も辞書的な意味を知っていないと文脈判断だけでは間違える可能性が高い。問2以降は、主人公を中心とした心情の変化と人物関係を問うものであり、設問形式自体は例年通りだが、本文に直接的な根拠のない問題がいくつかあり、やや難易度の高いものであった。また、問6の表現の特徴問題を二つとも正解するには、注意深く選択肢を読む必要がある。全体的には昨年よりやや難化したといえる。

〔解説〕

問1 語句問題

語句は三つとも慣用表現で、「本文中における意味」を問う問題ではあるが、あくまで「辞書的な意味を優先して解く」というのは例年通りの鉄則パターン。

その意味で、(ア)の「老成した」は迷う問題。文脈判断だと正解の③ではなく、他の選択肢を選んでしまう可能性があるが、あくまで辞書的な意味は「年

問2 標準

のわりに落ち着いた」なので、正解は③。陽平の年齢が四十代後半であると書かれているのも迷う材料になっている。

(イ)の「不意をつかれて」は文脈的にも辞書的にも⑤の「思いがけないことにびっくりして」が正解。

(ウ)の「教室の体裁をなし」は、①がひっかけだが、これも辞書的な意味を優先して、正解は⑤「教室らしい様子になって」。

正解 (ア) ③ (イ) ⑤ (ウ) ⑤

傍線部A「まわりを拒んだりはいしなくても、ひとりだけべつの時間を生きているような雰囲気を持っている」とあるが、「絹代さん」は「陽平さん」をどのような人物としてとらえているか。その説明として最も適当なものを選べ。

この問題を解くには、まず選択肢にある四字熟語の意味を知っていることが前提になる。

①の「泰然自若」は「落ち着いて物事に動じない様子」、②の「無為自然」は老荘思想の基本的立場を表した語で、「人為的な行為を排して、自然のままであること」、③の「謹厳実直」は「きわめてまじめなこと」、④の「闊達自在」は「心が大きく、小さな物事にこだわらず自由なさま」、⑤の「直情径行」は、「思ったことを隠さず、そのまま言ったりしたりすること」。

このうち、傍線部の「まわりを拒んだりはいしなくても、ひとりだけべつの時間を生きているような雰囲気」と食い違ったり、合致しないものは、③・④・⑤の三つ。特に⑤はまさに反対の性格と言える。また③は、「爽やかで」とあるところも、問1の(ア)でみた「老成した」の意味からして×になる。残った①と②だが、陽平が②の「隠遁者」ならば、世俗を逃れ隠れて住むことになるのだが、ここでは書道教室を開こうという人物なので隠遁者とは言えず、×。正解は残った①になる。

正解 ①

問3 基本

傍線部B「絹代さんにはなぜかそれがとても嬉しかった」とあるが、この部分を含む子どもたちとのやりとりを通してうかがえる「絹代さん」の心情とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを選べ。

この問題はまず、傍線部中の指示語を正確にたどることが大切で、「それ」が何を指しているかをとらえる。

「それ」が指しているのは、絹代の「泣くふり」に対して、「子どもたちが逆に喜んで「ぜったいにおねえちゃんとは呼んでくれない」という部分。では、

なぜそうした子どもたちの反応が嬉しいかと言えば、「なんだか親類の家に遊びに来ているような雰囲気なのだ」とあるように、他人の子どもたちなのに、家族や親類のような親密さを感じるからだとわかる。つまり、絹代にとって子どもたちは、家族同様の関係に思えるのだ。

選択肢では、そうした家族的な親密さを感じて嬉しく思っているという内容のものは④のみで、これが正解。また、④の「父親の死後、母親とふたりきりで寂しく暮らしていたが」の部分も事実関係を過不足なく押さえている。

①の「仲間意識」は近いようでいて家族意識とは違うので×。②の「保護者になったように」では、どういう意味なのかはつきりしないので×。正解の④にあるように「親密さ」などの語がないのが致命的。③の「陽平さんに近づいたような気がした」は、この段階では無関係での外れ。⑤は指示語の内容がとらえられていない。また、「静か」⇕「活気」の問題ではないので×。

正解 ④

問4 やや難

傍線部C「とりわけ絹代さんを惹きつけたのは、教室ぜんたいに染みいりはじめた独特の匂いだった」とあるが、「絹代さん」が匂いに惹きつけられたのはなぜか。その理由として最も適当なものを選べ。

「匂い」に惹きつけられた理由については、傍線部のあとに展開していく中で明らかにされる。小説ではよくある形だが、ある象徴的な事件・事物や環境変化などをきっかけにして、時間が過去にフィードバックして回想に入っていくシーン。今回はそのキーワードが「墨の匂い」であった。

絹代の記憶が過去に引き戻されることで回想されるシーンは、かつてこの家で行われていた養蚕ようさんであり、それは「絹代」という名前とも関係のあるものだった。そして、名付け親である祖母や「同居していた息子夫婦」など「家族」とのなつかしい思い出へと変化していく。問3同様に「家族」がキーワードになっている。また、「絹代」という名前の由来とのからみも要素としては必要だ。

選択肢をみるとその二つの要素を満たしているのは②であり、これが正解。

①は「子どもたちと一緒にいる楽しい時間と重なって」の部分が×。③では単に蚕のことを思い出したに過ぎず×。④は全体的に×。陽平はここでは無関係。⑤はちよっと迷うが、正解の②と比べてみると、名前からかむ要素がなく、また一番大切な「家族」についての言及がないので×。

正解 ②

問5 やや難

傍線部D「有名な女優さんとおなじだねえと大人たちからいくら褒められても嬉しくなかった名前を、陽平さんは、あたたかい、人肌に触れるために生まれてきためらかな布地に、一瞬で変えてくれたのである」とあるが、ここに至るまでの「絹代さん」の心の動きはどのようなものと考えられるか。その説明として最も適当なものを選べ。

文章全体の最後の部分に長い傍線が引かれており、それに対応するように選択肢の文も長い。本文に確実な根拠がない問題なので、選択肢をかなり丁寧に比較して落とすといかないと正解できない。

まず、直前の「頬が少しほてった」に表されている絹代の気持ちは、陽平が示した愛情表現に対するものだとわかる。ただし、これをどこまで踏み込んで解釈するかに関しては本文中に根拠がないといっている。

⑤のように「愛情を受け入れよう」と決心している「レベルなのか、それとも②や④のように「一緒に生きていこう」とまで考えていると判断しているのかで迷う。一方、③のように、「これまでの人生を肯定的に受け入れることができる」という結論になっているのは×。また、①のように「温かい気持ち」レベルでは絹代の陽平に対する愛情の説明としては不足している上に、原因として「名前の意味を教えてください」とあるところが×。これはすでに絹代にはわかっていることだと推測されるので、ここでの原因にはならない。

残った中では、④は書き初めに託された陽平の絹代への愛情表現の言及がなく×。⑤は名前の意味を肯定的に受け止めたところがあるが、その原因が「陽平の書き初め」になっていないところが致命的ミスで×。②にあるように、書き初めに託された陽平の愛情表現こそが絹代のこれまでの考え方を一変させたのである。この選択肢⑤は要素的には正解の②に近いのでかなり迷うが、結論に至る原因部分の違いをしっかりとつかんでほしい。

②は、「自分のことも肯定的に受け止められるようになり」とある部分が本文にはなく、また「一緒に生きていこうと考えている」は言い過ぎではないかと考えて落としてしまった人があると思う。しかし、他の選択肢が致命的なミスを持っているのに比べると、以上の点は△程度なので②が正解となる。

正解 ②

問6 標準

この文章における表現の特徴について説明したものととして適当なものを次のうちから二つ選べ。

小説問題の最後の「表現の特徴」について問う問題は、選択肢を要素に分けて消去していくのが確実な解法だ。

- ①は「特異な感性」と呼ぶほどのものではないので×。
- ②は「感覚に訴える表現が多用される」「絹代さんの実感」の部分が要検討だが、特に間違いとはいえない。
- ③は「かぎ括弧を用い」ないことで「現実感が生み出され」という因果関係はなく、それによって「人物が生き生きと描き出されている」と結論付けるのは無理があり×。
- ④は「回想の形で語られる中に現在形の表現が挿入されることによって臨場感が強められ」とあるが、表現上そうした効果は認められない。また、「登場人物の心理状態と行動との結びつきが明示されている」というわけでもないで×。
- ⑤は全体的に陽平の人物像を浮かび上がらせる効果のある例が説明されており、問題ない。
- ⑥は「平仮名書きが多用される」ことで「大人の世界に子ども視点の導入されるのはいいとしても、「物語が重層的に語られている」わけではなく、あくまでも主人公の絹代が中心となっているので×。

正解 ②・⑤